
学園戦争

ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園戦争

【Nコード】

N3824V

【作者名】

ライム

【あらすじ】

いつもと変わらない、そんな些細なことが幸せだと感じるようになった。ある日、何気のない朝。学校に着いたと同時に放送が流れる。それは『饗宴』と言う組織からのものだった。そしてその放送の内容は絶望的で、何もかもを変えてしまうものだった。『貴方達には殺し合いをしてもらいます。ルールは簡単。貴方達が今持っている物それを誰でもいい、相手から殺して奪えばいいのです。ですが、もしその武器を無条件で渡したり渡された場合その二名は失格とされ私たちが直々に殺しに行きます。また、三日後に元々持つて

いた一つしか手にしていなかった場合……、分かりますね？ 反逆
など考えないように、それをして後悔するのは貴方達なのですから
——』

プロローグ 終わりを告げた日常

これは何の運命なのか。

これは何の罰ゲームなのか。

これは何の悪戯なのか。

そんなこと俺は知らない。

知るよしもない。

けれど、これだけは分かる。

あの日あの時あの場所をもつてして……。

俺の人生は一気に崩れ去ったのだ——……。

それはいつもと変わらない何気ない平和一色の事だった。

「おつす、おはよーみんな」

俺は軽く挨拶をしながらクラスへと入っていく。

それに皆も小さくも挨拶を返してくれる。そんな中、ひときわ目立つ男の声が俺の耳まで届いた。

「よお、カイト。今日もいい天気だなあ。どうだ？ 一緒に飯でも」

「エンか。って言うか一世紀前のナンパ野郎みたいな口調で話しかけるのやめてくれる？ ただでさえお前が女嫌いなせいで俺が不審な目で見られてんだから」

カイト、というのは俺の名前。あさなみ朝波 かいと海斗。

特に目立つような特技が無ければ、悪いこともない。まあ、本当に悪いやつなら学校に来るっていう時点でおかしいからな。

まあ、少しくせ毛がかっているって言うのが俺の唯一の特徴かな。

そんでもつて、朝から俺を口説いてきたコイツ。

名前は宮得みやえ 火焰かえん。

幼馴染って訳でもなければ接点はこの学校という意外何もない男

友達だ。

まあこいつは俺と違って才色兼備で有能な奴。何をやらしても上達し、そして飽きる。これがコイツの良い所でもあり悪い所でもあるんだが……。

それでもって女嫌いつて言う性格が無ければ最高なんだけど。なんでも幼いころに母親から虐待……所謂DVを受けていたらしく、そのせいで今も女子が嫌いだとか。

今現在ではコイツが女嫌いなのはこの学校中に知れ渡っているが、入学当時は告白がかなりすごかった。それはもう、俺と話している時でさえも割りこんできて告白されるくらいだ。

「……？　どうかしたか？　俺の顔を見て」

「なんでもないっての。ただかなり残念極まりないなってな……はあ」

「人の顔を見て溜息ってかなり失礼だぞカイト。一回死ぬか？」

そう言うつとエンは俺の肩に手を回す。

「そう言う所があるから俺はお前と蜜月って噂が出るんだっ！！　少しくらい自重しろっ！」

俺は鬱陶しそうにその手を払いのける。

「はあ、カイトは冷てねえなあおい」

肩をすぼめエンは自らの席へと戻っていく。

そう、此処までは何時もと同じ日常だった。

そしてその時が来るまでは俺も、いつもと同じだと心の底から思っていた。

だが運命の歯車が回る音はすぐそこまで迫っていた。

「……？　何だコレ……？」

机に行くと、そこには布に包まれた何かがあった。

大きさは、うんテレビのリモコンと同じくらいだ。けどリモコンを布にくるんで渡すか？　普通。それとも新車の嫌がらせか？

「ああ、ソレ？　なんか俺んどこにも似たようなものあつたぜ？」
俺の言葉に反応するように隣の席に座っている竹中くんが同じような布に包まれた物を出してくる。

「なんか試してみたんだけど、布取れなくてさ。意味分かんないよな、朝来たら全員の席に置いてあんだぜ？」

「じゃあ嫌がらせじゃないのか」

「嫌がらせだつたらすごい規模だろ。クラス、いや全校生徒にさ」
確かにと俺は頷く。

時計を見れば担任が来るまであと一分だ。来たらこのことも訊けばいいだろう。

周りを見れば徐々に席へ生徒たちは座っていく。と同時に布に包まれた何かを不思議そうに見つめる。

良くみれば布は同じだけど形は様々だな……。

仲間はずれとかのアレか？　全校生徒で仲間を探す、とか。

その時、朝の放送が流れた。

ピー、ガコツ……。

『初めまして、鈴棟学校の生徒のみなさん』

放送からはこれまで訊いたことのない声が流れ出した。

新任教師とかの紹介か？　なら朝礼でやればいいのに……。

そんな思いも裏腹に話は進んでいく。

『私……いえ、私たちの名前は“饗宴”^{きやうえん}。一種の組織だと思っても構いません』

何が言いたいんだこの人は……？

若干思考がずれた放送を訊いてクラスメイトは少しずつ騒ぎ始める。

『さて、私たちがどうしてこのような放送を流しているかと言うと……。まず、今日朝に此处へ来たら各席へ布に巻かれた何かがあったはずです』

ああコレの事？　じゃあこれはこの放送の人たちがやったことなんだな。

『それが今日今から一〇分後に開封可能となります。そしてその中には、様々な種類の――“凶器”があります。そうです、人を殺すアレです』

……え？　なん、だつて？

凶器……？　嘘だろ？

『さて、このような回りくどい言い方は嫌いでしよう。では単刀直入に言います』

『――貴方達には殺し合いをしてもらいます』

一瞬にして血の気が引いた気がした。

そしてそれに伴うようにしてクラスの騒いでいた連中も静まり返る。

『今、職員室や携帯電話、大人への助けを求めても無駄です。なお、この放送室への侵入は不可能でしょう。此处で今から三日間貴方達には殺し合ってもらい、そして三日後私たちが認める生徒のみこの地獄から解放しつれていきます。また職員室へ行った場合その人間はたちまちその場で嘔吐することでしょう。電話回線は切っています、外への通信は不可能です』

淡々と説明していくその声は何故か俺の頭の中にすらすらと入っていく。

『ルールは簡単。貴方達が今持っている物それを誰でもいい、相手から殺して奪えばいいのです。ですが、もしその武器を無条件で渡したり渡された場合その二名は失格とされ私たちが直々に殺しに行きます。また、三日後に元々持っていた一つしか手にしていなかった場合……、分かりますね？　反逆など考えないように、それをし

て後悔するのは貴方達なのですから』

……どういことだよ。

今の今まで普通の生活を送っていたじゃないか。

アレか？ これはドッキリってやつなのか？

『つまりは変な平和主義を持たないことです。相手を殺す時にはためらいもなく、そして殺しましょう。食事は食堂です。朝は七時から八時、昼食は一二時から一時、夕飯は六時から七時、各食事の間に私たちが用意します。また不意打ちで殺してもよしとします。故に食事や夜寝るときなど注意を怠らないようにしてください。ルールはこれだけ。それでは三日後……元気な姿で会いましょう』

ブツ――

景気良く切れた音。

それとは裏腹にクラスの人々、学校の全員がきつと心の中が無になっっていただろう。

そう、此処から始まったのだ。

俺の、俺たちの死と生の間際を歩く戦いが――……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3824v/>

学園戦争

2011年8月1日03時24分発行